

千葉大学ユニオンニュース 第99号 2017年2月24日

編集・発行：千葉大学ユニオン 事務局：西千葉キャンパス旧薬学部1号館119室 メール：cuu@e-mail.jp

電話・FAX：043-290-2234 HP：http://www.age.cc/~cuu/（過去のニュースもご覧になれます）

☆職場でお困りのこと、お気づきのこと、ご質問・ご意見をお寄せください。

団体交渉結果速報

千葉大学ユニオン委員長 安藤哲哉

平成29年2月17日（金）15:00から千葉大学ユニオンと首都圏大学非常勤講師組合合同の団体交渉を行いました。「国立大学法人千葉大学非常勤職員就業規則について、第5条は改正しないが、5年を超えて再採用され無期転換を申し込んだ教職員についての規定は設ける必要があり、改正作業を行っている。ただ、申し訳ないが今年度末には間に合わないと思われる」とのことでした。「5年目の再採用（更新）の条件（評価方法など）についても、現在検討中」ということです。今年度中に、各部署に、この件に関する通知を行うそうです。

交渉の詳細については次号のユニオンニュースに掲載予定です。

国際化と協働：空間と情報がつくる境目と境界線

小林 聡子（国際教養学部）

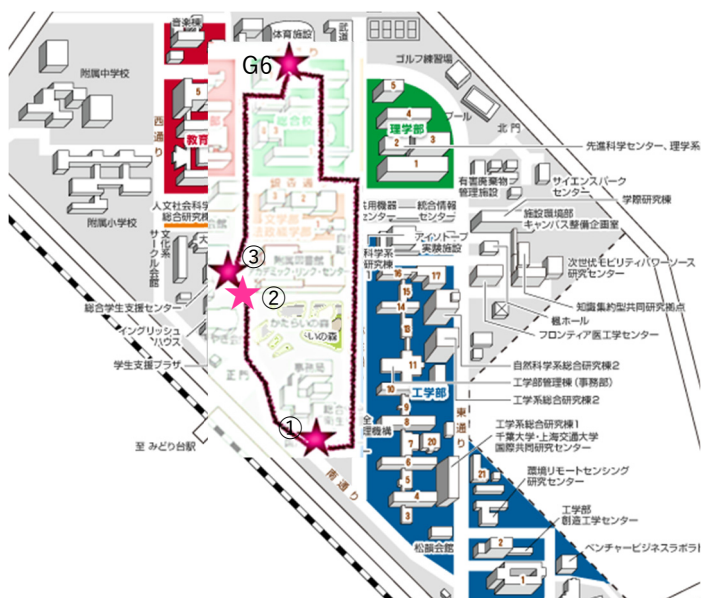
「外国人」「女性」「留学生」「教員」「若手」「研究者」「専任」「障がい者」「英語学習者」—大学教育の日常で触れる社会的アイデンティティの категорияは多種多様です。特に、近年文部科学省が推し進めている大学のグローバル化事業（「グローバル30」「グローバル人材育成推進事業」「スーパーグローバル大学等事業」など）の流れの中で、「異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ」（グローバル人材育成推進会議「中間まとめ¹⁾」より）がグローバル人材の柱の一つとされたり、「外国人留学生」や「外国人及び外国の大学で学位を取得した専任教員等の割合²⁾」の増加が大学のグローバル化の成果指標に挙げられたりと、民族や国境に関するアイデンティティの категорияが、政策段階で強調されていることがわかります。私自身、米国にて学位を取得し、平成25年度より国際教育センターの特任助教に着任、平成28年度より新設の国際教養学部の専任助教となりました。大学のシステムにおいては、私のように海外で学位を取ったものは「外国人教員」として数えられ、「女性」であることから、統計的には大学の

「多様性」に貢献していると捉えることもできるかもしれませんが。

着任以来、学部1年生から短期留学生までが様々な専門を教養教育として協働で学習する授業（ジャパニーズ・スタディーズ）の開発・実践に携わっています。進んでいく教職員及び学生の多様化を活かし、より包括的（inclusive）な教育・研究環境を築いていくには、まだ多くの課題があるのかもしれませんが。昨年10月のユニオンの集まりで「国際という境界」というテーマで国際教養学部を事例にお話しさせていただきましたが、このニュースレターでは「国際化」に関して、一つの学部だけでなく大学全体としても考えていきたい部分に焦点を当てようと思います。

2年前に短期交換留学プログラム（J-PAC: Japan Program at Chiba）にて一年間千葉大学で学んだ留学生が、以下のようにコメントしていました。

「千葉大学では、自分が留学生であり、その他ののだと感じる。もっと自分が千葉大学の一部だと感じるには、より色々な人たちと関わることができる自分の居場所があるといい。」彼以外にも、このように留学生らが周縁性を口にするのを度々耳にします。「留学生だから仕方ない」と一蹴される方もいるかもしれませんが、外国人や留学生など、国籍や民族、また大学の身分上の善でも悪でもない「境目（border）」が、どのように日常的に超えがたい「境界（boundary）」となってしまうのでしょうか。まず、物理空間に着目すると、専門を学びに来ている留学生は専門の学部棟もありますが、多くの交換留学生に共通する活動範囲は、日本語教育を受ける①国際教育センター、②English House、③ライフセンターの3箇所、つまりキャンパス全体でも正門付近のみとかなり限定されていることが往々に見受けられます。一方、①や②を日常的に利用する学部生はかなり限られていることから、短期留学生と関わりを持つどころか、見かけることもほとんどない学生も多いことが容易に想像できます。この短期留学生と学部生の境界線を作為的に交差させるべく、本年度は試験的にいくつかのジャパニーズ・スタディーズの教室をG6棟に移動させてみました。当然



<図：キャンパスマップと留学生の行動範囲の重なり>³⁾

のことながら、G6 棟で授業があることから授業前後に棟内の自習室やラウンジを利用するようになった留学生も出てきました。つまり、物理空間的にも周縁的だった留学生の行動範囲が広がり、日常的に留学生を見かける学部生も多かれ少なかれ増えたのだといえます。移動範囲が増えることは効率という面でいえば賛否両論かと思いますが、これが学生間に起こる境界線を直接揺るがすまでには至らないかもしれません。しかしながら、構内を歩く理由を付与することで互いを見かける範囲が広がるというのは、関わりを持つための一歩であり、また留学生らがより大学の一部であると感じるための仕掛けにもなるかと思います。この行動範囲の重なりと帰属意識という点では、国際教養学部教員の研究室の分散という課題とも重なってくるのかもしれません。

物理的な距離は、心的距離と関連があるといわれていますが、それだけではなく日常的に関わりがあるかないかというのは、小さな情報の交差にも影響があります。例えば、ある短期留学生は「日本語以外で情報発信がなされることがあまりないから、大学で何が起きているのかほとんどわからない。」と述べていたのですが、言語の問題については、今はスマートフォンのカメラをかざすだけで翻訳してくれるアプリケーションなども進化し続けていること

から、実際には大学における情報共有のシステム化の方が重大な課題なのかもしれません。何が起きているのかを知ること、誰が何をしているのかが見えるシステムがあれば、例えば物理的な距離があつたとしても、自分の大学における所属や役割の認識、実感、また行動へとつながるのかと思います。これは何も学生間に限ったことではなく、教職員においても同様のことがいえるかもしれません。特に、学部間また学部内においても、個々や相互の関わりが日常に見えないことが常であることから、情報を適切に収集し、整理、配分する専門的なハブが必要なのかと思います。このような情報の共有化を通して、より多様な人材を活かすことや、公正な評価のあり方へとつながるのかと思います。

近年、グローバル化という言葉とともに、協働という概念も注目されていますが、単に多様性を統計的に増やすだけではなく、どのように相互に学び合う機会をもてるのかが課題であると思います。学生間や教職員間の行動範囲を交差させることや、共同・共有作業を増やすことは、協働に向けての重要な一歩です。しかしながら、互いに多角的な観点を受容しつつ、自己を批判的に振り返り、必要なところを協働的に変えていく柔軟な姿勢がなければ、同じ場所においても互いを分かち境目がただ強化され、結果的に境界になっていく可能性もあります。国籍、人種、民族、専門、学年、ジェンダー、能力など、相互行為の中で差異が起こることは当然です。ただ、その差異が境界となるのではなく、日々の風景に溶け込み合い、多様な他者との協働が当たり前になり、日常になること—つまり「協働性 (collaborativity)」を培うことで、真に包括的な教育・研究環境にしていければと思います。

<引用文献>

- 1) 経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援「制度概要」 <http://www.jsps.go.jp/j-gjinzai/gaiyou.html>
- 2) スーパーグローバル大学創成支援概要図 http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/sekaitenkai/_icsFiles/fieldfile/2016/09/08/1360288_03.pdf
- 3) 千葉大学ホームページキャンパス地図より引用して加工 http://www.chiba-u.ac.jp/campus_map/nishichiba/

加入 申込書 千葉大学ユニオン委員長 安藤 哲哉 様

千葉大学ユニオン規約を承認し、千葉大学ユニオンに加入いたします。 2017年 月 日

お名前: ご所属:

E-Mail:

問い合わせ先 電話・ファックス:043-290-2234 メール:cuu@e-mail.jp

